

学校苦羅死！

にんにくましまし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その日、日常が【非】日常へと姿を変えた。▼巡ヶ丘学院高等学校に通っている3年生『龍宮 拓海』。▼彼女は今日もいつもの日常を不良仲間と友達と過ごすはずだった……。しかし何時もの日常が訪れることは無かった。しかし、彼女は今日も駆け出す友達の為にそして……。自分のために。▼初投稿です。作者は、がっこうぐらし！は単行本勢です。アニメも一応見ましたが、恐らく原作沿いになります。アニメオリジナル設定ももしかしたら入るかもしれません。

目次

第1話	はじまり	1
第2話	そのあと	9
第3話	せいあつ	13
第4話	ひみつ	16
第5話	ぶかつ	21

第1話 はじまり

「おーい、拓海。お前も一緒にカラオケこいよ。楽しもーぜ！」

「ああ、悪いな。なっちん。今日はめぐねえに呼ばれてんだ。勉強の補修を受けないといけないんだよな。だから今日は行けないわ。オレの分まで楽しんで来いよ！」

「あははっ！そんなんさぼっちゃえばいいのに・・・拓海も真面目だねえー・・・分かったよ。頑張つてねー！」

「おーう。頑張るわー！」

帰りのHRも終わり放課後になったオレは何時もの不良仲間たちにカラオケの誘いを受けたが、今日はめぐねえこと【佐倉 慈】先生に放課後、補修を受けてもらうため居残るように言われていたため断った。

さぼるのも手なのだがこんな問題児なオレを唯一見捨てることなくいつも親身になってくれてるめぐねえからの頼みなので仕方なく残ることにした。他の先公は全員、問題児であるオレと関わろうとせず邪魔者扱いしているのを知っているため基本は言うことを聞かないがめぐねえは別である。

「さて・・・ここどうだうだしてても仕方ねーし、とつとつ行って素早く終わらせるとしますか。」

オレはカバンを持って3-Aの教室へと向かっていった。

「ういーっす、めぐねえいるー?・・・って由紀じゃねーか。お前・・・また補習か?」

「うん? あっ!? たくちゃん! またって言うけどたくちゃんだっておんなじじゃん! 人のこと言えないよー!」

「あー? オレはいいんだよ。だってオレのは由紀と違ってやれないん

じやなくてやりたくなくてやってないだけなんだから。」

「それ、私より立ち悪いよ!」

教室へ入っていくとそこにはいつもの見慣れた人物。猫みたいな帽子をかぶっている女の子の「丈槍 由紀」が机の上にノートを広げながら——と言つても、ノートには一字も書かれていないが——座っていたので何時ものように話しかけた。

「まあいいや、それよりもどこが分かんないんだ?言ってみろ教えてやる。」

「ほんとう?ありがとー、ええつとねここなんだけど……。」

めぐねえがまだ来てないみたいなのでオレは由紀の隣に椅子を持っていき腰を下ろすと由紀が分からないと言つて示したところの問題を見た。

「ああ、ここはだな……こういう風にするんだよ。」

「ふんふん。」

暫く由紀の勉強の面倒を見ていると廊下からコツコツと足音がこちらに向かっているのが聞こえ、教室の前で止まるとドアが、ガラツと開かれた。

「ごめんなさい。遅れちゃつて。」

「遅いぞめぐねえ!罰としてこの補修が終わったらジュースをおごつてくれよ!」

「ごめんね。ちよつと教頭先生に捕まつて……。丈槍さんも遅れてごめんね。」

「大丈夫だよめぐねえ。たくちゃんに教えてもらつてたから。」

めぐねえは、申し訳なさそうに眉を下げ謝つてきたのでオレは直ぐに気にしないことにした。と言つても、元々補修を受けざる得ない状況を作り上げたオレらの悪いのにちやつかり謝るのがめぐねえらしいな……。

「冗談だよ。そこまで怒つてないから頭下げなくていいよ。それより、プリントどれやればいいの?」

「ああ、これよ龍宮さん……。あと、毎回言ってるけど龍宮さんはやればできるんだからしつかりと授業受けてもらえないかしら?後、めぐ

ねえじゃなくて佐倉先生ね。」

「ありがとうございます。ぎいます。．．あと、オレも毎回言ってるけど考えとくよ何といつてもめぐねえの頼みだしな。」

「そういつて、何時も授業に出てくれないじゃない．．．。」

めぐねえはそういつて肩を下ろしたが直ぐに切り替えて由紀の対面へと椅子を持ってきて腰を下ろした。

「とりあえず、続きは私が教えるから龍宮さんは自分のプリントやっ
ておいてね。」

「了解です。」

オレはめぐねえから渡されたプリントを終わらせるため由紀の隣の席に座りペンと消しゴムをカバンからだしプリントを書き始めた。

「よし、終わりー。どう？めぐねえ？頑張ったでしょ？」

「そうね、よくやったわよ丈檜さん。」

「えへへ．．．たくちゃんは終わった？」

「おう、とつくのとうに終わってて由紀待ちだ．．よし、この後コンビニよつてアイスでも食べよーぜ、オレがおごつてやるからよ。」

「ほんとー!?!たくちゃんのデブっばら！」

「はははっ、こやつめっ！それは私が太つてると言いたいのか？それにそれを言うなら太っ腹だろ？」

「こらー、下校中の買い食いは駄目よ。」

めぐねえはそうたしなめるとスマホが振動しているのに気付き自分のポツケからスマホを取り出し操作し始めた。

「．．．なにこれ？かなり近い．．．？」

「めぐねえ何見てるのー？」

「こらっ由紀。人のスマホ横から見たらダメだろ？もしめぐねえがエッチなサイトとか見てたらどうするんだよ。」

「ええー!?めぐねえエツちなサイト見るのー!？」

「みません!!」

オレがめぐねえをからかうとめぐねえは顔を赤くしムキになって反論した。

「まあいいやー、たくちゃんかえろー。」

「りようかーい。それじゃ、めぐねえまた明日ー。」

オレと由紀がカバンを持ち教室を出ようとする後ろからめぐねえが引き留めてきた。

「あつ・・・ちよつと待って二人共。今電車止まってるみたいだからもう少し学校にいたら？」

「そうなんだ・・・おなかすいたのにー。」

「まじかよ・・・。あぁーついてねーなー。」

オレと由紀はお互いに肩を落としたが、直ぐに由紀が顔を上げめぐねえに屋上に行つていいか聞いた。

「ねえ、めぐねえ。屋上行こうよ。プチトマトとかあるんでしょ？」

「あるけど、食べちゃだめよ?それに屋上は立ち入り禁止だし。」

「・・・それなら、園芸部の見学つてことでいいんじゃないか?それなら入れるだろ?」

「おお!たくちゃん頭いい!」

「ふふつまあな。」

めぐねえは一回は渋って見せたもののオレの提案を聞くと顔を緩ませながら了承してくれた。

「鍵空いてたね。」

「誰かいるのか?」

オレ達はめぐねえを先頭に屋上の階段を上がりドアに手を掛ける

と鍵は掛かっておらずすんなりと開いた。

「あ、すみません。カギ閉め忘れてって・・・拓海ちゃん？どうしたの屋上なんか来て。」

「うん？おおー、そういうえば悠里お前園芸部だったけ？忘れてたわ。」
「もう、幼馴染のやつてる部活ぐらい覚えててよね・・・あ、先生すみません。カギ閉めしてもらってもいいですか？」

屋上には如雨露を片手にグラマラスな体型が特徴的な私の幼馴染である【若狭 悠里】が立っていた。

「わあー！これトマト!?おいしそー。」

「ふふっ、食べたいかしら？お手伝いをしてくれたら食べてもいいわよ?・・・あ、拓海ちゃんもトマト食べたい?だったら手伝ってね。」
「バカタレ、オレがトマト食えないの分かってて言ってるだろ?それに、何にも貰えなくてもやるよ。暇だしよ。」

「ありがと、とても助かるわ。」

「はいはい！私も手伝うよ！」

由紀の奴がトマトに目を輝かせて悠里の近くまで行くと悠里が手伝ってくれたら食べてもいい由紀に言い、その後にも聞いてきたが悠里はオレがトマト嫌いなのを知っているのでどこか意地悪そうに笑みを浮かべていた。

「・・・・・・・・・・。」

「(めぐねえ?)」

由紀がホースで水をまき悠里とオレが土から生えている雑草をむしり取っているとまだにドアの前で立ち尽くしているめぐねえが視界に入った。

「悠里さんはいつも一人で菜園の世話しているの?」

「ううん。今日はどうしてか誰も来ないのよね・・・。」

「単純にさぼりだろ?」

「拓海ちゃんと一緒にしないでくれるかしら?」

由紀が一人で菜園の世話をしていたのに疑問を持って悠里に聞いたのだが本来園芸部には他にも部員がいるのだが今日は誰一人としてこなかったようだ。

「……どうして母さん出ないんだろ？ 神山先生……？ もしもし——っ!？」

「ん？」

「へ？」

「お？」

屋上のドアからバンバンと強く叩く音にびっくりしてオレ達全員変な声を出して、ドアの方に顔を向けた。

「なーに？」

「他の部員が来たのかしら？」

「今開けるぞー、待ってなー。」

ここで立ち尽くしているのも何だと思えばオレはドアのカギを開けに少し駆け足で向かう途中でめぐねえから普段と違う声色で止められた。

「待って！」

「めぐねえ……？ でも、カギ閉めてんだから開けてやんねーと、何時まで経つても入ってこないぞ？」

めぐねえは少し考えた後、小走りですらの方まで行きドアに耳を押し付けた。

「お願い……開けて……。」

めぐねえは、カギを開けドアを開け中に入ってきたのはツイインタールが特徴的な女の子の「恵飛須沢 胡桃」が肩に男の人を担ぎながら倒れこむように入ってきた。

「胡桃!? 何があったんだ？」

「この人けがしてる……？」

オレと悠里がすぐさま駆けつけて胡桃の近くに腰を下ろすと悠里が男の人の方に誰かに噛まれたような跡があるのを見つけた。

「……？ 喧嘩にしても噛み後？」

「そんなことよりも保健室に「ダメだ！ 下はダメだ！」 えっ？」

「それ……どういう「めぐねえ……何あれ？」 どうかした？ 丈槍さん——なに……これ？」

「はあ？ 人が人を襲ってる？」

悠里が保健室に連れて行こうとするとそれを拒むかのように胡桃が大声を出し、それを不思議に思っためぐねえが胡桃にどういふことか聞こうとしたら由紀が声を震わせながら呼ぶのでそちらに顔を向けるとグラウンド一面に人が人を襲っている光景が目飛び込んできた。

「何か急に皆ああなって・・・陸上部も巻き込まれて・・・で、先輩も・・・。」

「救急車呼ばないと・・・。」

「もうかけてるけど、つながらない・・・。」
「どうなってんだよ!?!」

胡桃が簡単に説明をし、めぐねえが救急車に電話をかけているようだがつながらず、色んなことが唐突に怒って少し苛立ってしまった私は、柵に向かって蹴りをいれた。

すると、そのすぐ後に街の方からもすごい大きい爆発音が鳴り響きオレ達は茫然と立ち尽くすしかなかった。

「どうして・・・何が起こってるの・・・。」

由紀が不安げに顔を歪ませているとドアの方からまた、バンツバツと叩く音が聞こえてきたかと思うとドアガラスを突き破りそこから人間のものとは思えないほど浅黒い腕が数本飛び出してきた。

「ひっ!?!」

「いやあああっ!」

「くそっ!きやがった!」

「何がどうなって・・・とりあえず、ドアを塞ぐ!めぐねえ園芸部のロッカーをドアの前まで動かす手伝ってくれ!」

「わ、分かったわ!若狭さんと丈檜さんはその洗濯機をこっちに!」
状況整理をひとまず置いて、急いでロッカーを押しドアの前まで持っていき塞いだ。

「くうう!?!以外に力強い!」

「ううん・・・はっ!?!恵飛須沢さん!」

オレとめぐねえが二人掛かりでロッカーを押ししていると胡桃が一緒に連れてきた男の人に襲われそうになっているのが見えた。

「胡桃!!逃げろ!!」

「う、うわあああああ!!」

胡桃が近くに落ちていたシャベルを掴み力任せに男の人に向けてスイングするとシャベルは男の人の首に命中し深いところまで入っ
ていき返り血が胡桃に降り注いだ。

その後もすでにこと切れている人だったものに何度もシャベルを
突き立てている胡桃を茫然としながら見ていると由紀が泣きながら
胡桃に飛びついた。

「ううう……うわああん……。ひつく……。」

「ばかだな……。何でお前が泣いてんだよ……。ていうか誰だよお前……。」

二人して泣いている姿にオレは只々眺めることしかできず、未だに
ドアを叩きつける音が鳴りやまない中、オレは日常というのは崩れ去
るときはこうも簡単に崩れ去ってしまうのかかというのとこれから先
どうなってしまうのかの不安を抱えたまま、ドアの向こうにいる奴ら
がこつちに来ないようにロッカーを押すことしかできないでいた。

第2話 そのあと

「で、だ。めぐねえこれからどうする？ずーっとこのまま屋上で過ごすっていつでも限度があるぞ。オレ的には3階だけでも安全圏を確保しておきたいかなーって思っている。めぐねえ達は思う？」

「私も拓海ちゃんの見解に賛成だけど、危なくないかしら？奴らがまだ学校内にいるかも。」

オレ達はあの始まりの日の翌日、これからについてを話し合いを始めた。このまま屋上にいても食べるものが菜園しかないのでは何時かそこが尽きる。外に出て行くにしてもある程度は安全圏を広げて置いていた方がいいと思いい意見を出した。

「いや、今は昼ぐらいだからまだ動くときじゃない。動くとすれば夜遅くから明け方が良いと思う。」

「それはどうしてかしら？」

「屋上のドアの音が消えていったら？あれはドアの前の奴らがいなくなつたから音がやんだまでは分かるよな？それでよその時グラウンドの方を見たんだが奴ら何処かに向かっているかのように学校から出て行ってたんだ。それからお前らが疲れて寝てる間にグラウンドをもう一度見たんだが・・・放課後見たときと比べるとほとんど奴らはいなかった。おそらく時間かそれとも他に要因があるかは分からないが夜遅くから朝方までは数が少ないんだと思う。」

「なるほど・・・それなら奴らが少ない夜遅くを狙って動いた方がいいわけね。」

「そういうことだ。だから決行するなら夜遅く、深夜ぐらいがいいか？」

オレが自分の考えを説明し、皆でここをこうしたほうが良いと意見を交換し合つて、今夜やる事に決まつた。

「とりあえず、先人は動ける奴がいいな。私は喧嘩をよくしてたから体力はあるから確定としてもう一人ほしいな。」

「なら先生である私が「私がやるよ。」恵飛須沢さん？」

ひとりで突っ走ってミスしたらシャレにならないのでお互いの

フォローの為に2人で先陣きって行動したいからというためぐねえが立候補しようとしたが、それを遮り胡桃が立候補した。

「大丈夫か胡桃？」

「何言ってるんだよ。私だって陸上部だぞ？体力ならめぐねえよりもある自信がある。」

「いや、そういうことを言っているんじゃないかな「大丈夫だ。行かせてくれ。」・・・分かった。なら、胡桃頼むぞ。めぐねえは殿で周囲の周囲の警戒と由紀たちのフォローに回ってほしい。」

オレは胡桃の肉体面より精神面——自分の少なくとも好意的に思っている人を不可抗力とはいえ殺めてしまったこと——の心配をしたんだが、胡桃の力強い大丈夫を信じた。

正直めぐねえは、武闘派よりは頭脳やフォローなどに回ってもらった方が向いていると思っていたためこの提案は正直ありがたい。

「でも、生徒である貴方たちにそんな役回り・・・。」

「めぐねえが優しいことはよくわかってる。だからこそめぐねえは、皆の心を支えてほしいんだ。先生つてのは生徒に寄り添って支えてくれるんだろ？だから頼むぜ・・・佐倉先生。」

オレが真剣な表情で頼み込むためぐねえは一瞬ポカーンと呆けたが直ぐに柔らかい笑顔になり俺の手を握り頷いた。

「分かったわ。なら先頭はよろしくお願いね・・・でも無理だけはしないこといいわね？」

「当たり前よ！オレだってまだ死にたくねーしな。」

オレとめぐねえの握っている手にさらに手が重なり合った。

「おいおい、私たちのこと忘れてないよな？」

「仲間に入れて頂戴。」

「わ、私だってやるときはやるよー！」

胡桃、悠里、由紀も同じように手を重ね、頷くと皆で「おー！」と気合を入れた。

「ならとりあえず、今日は早めに寝ることにするぞ。オレはもうちよつとやりたいことがあるからそれやってから寝るから。みんなは先に寝て。」

オレがそういうと各自柵を背にしたり、地面に寝ころんだりして仮眠を取り始めた。

「よし、確か・・・屋上の隅にあるロッカーに・・・あつた。」

オレがロッカーから取り出したのは一本の木刀である。オレがレディースに所属していた時の愛用していた武器である。一応武器ありではあるが他のレディースの奴らは男の暴走族にも負けたことはない。

「久しぶりに使うな・・・。まだ腕鈍ってないといいけど。」

2年の途中からとある理由でレディースを止めてきた。それと同じにこの木刀も封印していたが・・・こんなことに使うことになるのはな・・・。

「よし、武器も回収したしオレも寝よう」「なあ、ちよつといいか?」「あ?胡桃?まだ寝てなかったのか?」

オレが寝ようとみんなのとこ迄戻ろうと振り向くと暗い顔をした胡桃が立っていた。

「どうした?何か相談があるなら言ってくれ。」

「そうだな・・・ええつと・・・不安なんだ。」

「不安?」

胡桃の口から出てきた言葉にオウム返しに聞き返した。

「ああ、3階をもし制圧できたとしても少しらくになるだけで根本的な解決にはならないんじゃないかって。本当に私たちは助かるのかって一度考えると不安で不安で仕方ないんだ。」

「何だそんなことかよ。」

「そんなことって・・・お前な・・・。」

暗い顔で何を言うかと思つたら・・・やっぱ戦えないからやめるとでもいうかと思つたら・・・。

「こつちは真剣に「今起きること、今やるべきことだけに集中しろ。結果というのは後から付いてくるもんなんだよ。」どういうことだよ。」

「あのな・・・そんな未来の話をしたところで解決策なんて出るわけないんだよ。ましてや、どのくらい規模で起きてるかも分からない日本だけなのか、海外は無事なのか、まだ分からないことだらけなんだ。」

考えたって時間の無駄なの。そんなことに考えを回すぐらいならどうやって今日を生きていくかを考えたほうが有意義だと思うぞオレはな。」

「そんなこと言われてもよ．．．不安なもの是不安なんだよ。」

「．．．まあ、不安なものも分かるけどな．．．でもお前には仲間がいるじゃねーか。オレがいて、由紀がいて、悠里がいて、めぐえねがいる。それだけでどっかで一人で生きているようなやつよりはマシだろ。それ以上は求めすぎだ。オレはこのまま4人で過ごしていつてもいいと思ってるぜ。」

「なんでだよ？助かりたくないのか？」

胡桃は理解できないといった顔で聞いてくるのでオレは胡桃の顔を見ていった。

「オレの好きな仲間たちがいるからな、オレにとってはそれで十分だよ。」

「はっ？好き？」

「おう、好きだぞ。」

オレの発言に暫く固まった後、みるみると顔を赤らめさせた。

「お、お前よくそんな恥ずかしいこと言えるな!？」

「ああ？何が恥ずかしいんだよ。好きな奴に好きって言わねーのかよ？」

「いや、それとこれとはって．．．くうー！お前と話していると調子狂うな！私はもう寝るー！」

そう言った胡桃は踵を返しずんと歩いて行った。何を恥ずかしがってるんだが．．．。

「オレもそろそろ寝ないと起きれないからな。」

そう呟いてオレもみんなの場所へと戻っていった。

第3話 せいあつ

「おい、由紀起きろ。そろそろ行くぞ。」

「ううん・・・まだ夜だよー。」

「こら、おバカちゃん。夜だから行動するんだろ。もう決めたこと忘れたのか?」

「・・・そうだった。」

作戦開始時刻に近づくとつれてめぐねえ、悠里、胡桃と起きてきたが由紀だけまだ寝ていたのでゆすって起こしてやると寝ぼけ眼をこすりながら「まだ夜だよ」と言ってきたので、軽く額にチョップをぼけている頭を叩き起こした。

「よし、これで皆準備完了だな。とりあえず、先頭にオレと胡桃次に悠里と由紀、最後尾にめぐねえ頼みます。」

「分かったわ。」

「ううー、今更になって緊張してきたよ・・・。」

「大丈夫だろ? 拓海の言う通りグラウンドを見てみたが昼より圧倒的に量が少ない。これなら校内にいる奴らの数もたかが知れていると思う。」

「でも、油断はしちゃだめよ。」

各自、荷物を持ったり、武器——胡桃はシャベル、オレは木刀、めぐねえはモップ——を持ちドアの前まで歩いて行った。

「制圧が目標だが、第一は自分たちの命だ。絶対に死ぬんじやーねーぞ・・・と言ってもお前らは全員オレが守ってやる。レディースとして暴れていてほぼ無敗の成績を持ってんだ。当時の愛刀のこいつもある何とかなる・・・いや、して見せる。」

「へへ、言うじやねーか。私だつてやるときはやるんだ。拓海ばつかにいい格好はさせないぞ。」

「私も、先生として皆さんを守り抜いて見せます。」

「周囲の警戒ぐらいなら私と由紀ちゃんでも出来るわ。一緒に頑張りますしよーね。」

「任せといてよー!」

よし、みんないい感じに元気が出てきているな、これならいけるだろう。

「んじや、行くぞ。」

オレはドアノブを握りゆっくりと回しドアを開けた。

奴らの数が少ないのもあり、それ程時間をかけずに制圧を終わらせることができた。といっても全部を一気にやるのは難しいので半分ぐらいだが・・・まあ、大戦果だろう。

そして、今現在は制圧した部分に奴らが入ってこないようにバリケードを設置をしているところだ。

オレはめぐねえ達に武器の手入れをしてくると言って少しの間抜け出していた。すると、後ろからコツコツと歩く音が聞こえてきたので振り向くと、シャベルを肩に担いだ胡桃が立っていた。

「私も、シャベルの手入れに・・・今回の作戦上手く言ってよかったな。拓海の言う通りあんまり奴らいなかったし。いたとしてもお前がすぐ倒しちゃおうし・・・やっぱ元レディースなだけはあるな。」

「まあ、レディースと言ってもオレが所属していた時間は短いけどな。」

案の定というか3階にはほぼ奴らがいなく、いたとしても一人二人でそれ程脅威にはならず、危なげもなく撃退することができた。

「だが、やっぱり元とは言え、人型に近い奴らをやるのは中々に堪えるな・・・。」

「・・・大丈夫だ。拓海だけにその苦しみは背負わせねーよ。私だってやれるんだ。一人より二人で背負った方が楽だろ?」

胡桃はこちらに顔を向けてニヤツと笑ってきたのでオレも笑い返し拳を前に突き出した。

「だな。ならこれからはお互いに背負っていこうぜ。」

「おうよー!蓮托生だなー!」

オレが突き出した拳に胡桃も拳を突き出し軽く合わせた。

「んじや、オレは先に戻っているから胡桃もある程度したら戻って来

いよ。」

「分かった。」

返事を聞いた俺は木刀を持ちバリケードを作っている由紀たちのとこまで歩いて行った。

——
すごかった。その一言につきた。

私も一応戦ったけど、あいつ・・・拓海のは一つの芸術に見えた。木刀をふるう動作から構える動作まで精錬されていた動きに戦闘中だというのに若干見惚れていたのは仕方のないことだと思う。

あいつはレディースに入っていたのは少しの間だからそんなに凄くないと言っているが、あれはそれだけのことでは出来ることじゃないだろう。昔、他に何か触る機会があったのだろうか？

それに、あいつが木刀をふるっている姿をあいつの幼馴染のリーさんだけはあまり良い表情をしていなかった・・・何か後悔？をしているかのような・・・。

私はそれに少し胸のもやもやを感じた。何でか知らないけど・・・。とりあえず、シャベルの血を落とさないと、何時までも付いたままなのも嫌だし。

私は考え事をいったん止めるとシャベルの手入れ作業に戻った。

第4話 ひみつ

「おはよう。」

「おはよう。」

3階の制圧に成功しある程度動き回れる暮らしをしてから数日ぐらいが経過した。その数日の間に色々この学校について分かったことと不思議に思ったことが出てきた。

分かったことは、何とこの学校の設備は生きているものが多いということだ。発電設備があり、水の洗浄施設もある。屋上菜園の備蓄倉庫もあるし家庭科室に行けば調理もできる。購入だつて凄く広いし洗剤なども売っている。ほとんど生活に困らないぐらいの暮らしをしていけるということだ。

ただ、逆に考えるとこの学校はこれほどまでに設備を整えるだけの何かが起きることを予期していたのではないかということだ。あまりにも不自然である。だが、そんなことを言つて余計な事を思わせるのも精神的につかれるので由紀たちには凄く設備が整つていて助かったぐらいの考えでいてもらった方が楽だろう。

しかし、薄々勘づいてくるときがあるだろうがそれまでは黙つておくことにした。

「今日のご飯ってなんだ？」

「今日は、昨日買ってとつてきたこれ……じゃーん、パスタよ。これで一気に作つて朝昼晩と持ちこたえさせましょう。ガスも無限にあるわけじゃないと思うし。」

「そうだな。まあ、そういう細かいところは悠里に任せる。昔からこういうのは得意だったもんな。」

「もう、また都合よく使つて……。まあいいわ。とりあえず、食器運びでもいいから何か手伝つてちょうだい。」

「あーい。」

オレは悠里のどこまで歩いていき、食器の場所を聞くと「あつちの棚にあるわ。」と言われたので指示通りの場所に向かい、棚から食器を取り出し机の上に並べた。

「そういえば、起きてきたのってオレが最後?」

「いいえ、まだ胡桃と由紀ちゃん。後、珍しくめぐねえも来てないわね。私が起きたときにはもうめぐねえはいなかったから先にいると思っただけどどこにいるのかしら?」

「ふーん。」

オレはそんなことを聞きながら、食器を並べ終えたと同時に今度は「そろそろ出来上がるから呼んできて」と頼まれた。舎弟をパシリに使ったことはあるが、オレがパシられるとはな……。まあいいや、呼んでくるか。

部屋から出てとりあえず、寝てる奴らよりもめぐねえを探そうと思いで道中人の気配がなかったため寝床と反対方向かなと思いいある程度進んでいくと職員室に見覚えのある後姿が。

「(お、めぐねえだ。あんなどこで何やってんだ?…お?ふふん。いいこと思いついた。)」

普通に呼ぶのも芸がないなと思いい、後ろから忍び足で近づいてめぐねえの背後からいきなり声を掛けた。

「めぐねえ! みつけ!」

「きゃああああ!」

めぐねえは盛大に悲鳴を上げると持っていた冊子?みたいなものを落としてしまった。

「(やりすぎだった?)」

とりあえず、謝ろうと思いい急いで冊子を拾おうとするとその表紙に驚くことが書いてあった。

「?緊急避難マニュアル?」

「……っ!」

オレが拾おうとするのより早くめぐねえが拾い上げるとオレから隠すように手を後ろに回した。

「ど、どうしたの?何か用事?」

「いや、(飯で来たぞって言うおうと思っ…それよりも、その後ろに隠した奴なんだ?緊急避難マニュアルって書いてあつたけど?説明してくれる?)」

オレが真剣なまなざしでめぐねえを見つめるとめぐねえは暫く口を閉じていたが、オレが話してくれるまで動かないと理解したのか、渋々口を開いた。

「実はね・・・こうなる前に教頭先生からこのことを教えてもらったたのよ緊急事態になったら開けるようになって言われてて。それで、この数日の間にそのことを思い出したの。あの出来事があったばっかはこのことを忘れててね。それで今日慌てて中を覗いてみたの・・・。」

「・・・それで、中身はなんて？」
そう聞くとめぐねえは顔を少し歪ませながら重々しく口を開いた。
「それにはね——。」

「な・・・それってマジなのか？」
「ええ、全部これに書いてあったわ。」

簡単に言うところの中にはこうなることを予期していたこと、なった場合の対処法、緊急連絡先、校内の見取り図、この出来事を引き起こしたと思われるウイルスのことが書いてあったらしい。

「らしいというのも、めぐねえも軽く読んだだけで深く読まなかったからが理由だ。」

「なるほど・・・ね。通りで設備が整いすぎていると思ったぜ。」
「龍宮さんも疑問に思ってたのね・・・。」

だが、これで分かった。この学校も先公たちもやっぱりろくでもない奴だったてことがな・・・。

「てか、めぐねえも知ってたのかこのこと？」
「知っているわけじゃないじゃない！私だって今知って心の整理ができてないの。」

だよな。めぐねえが知っているわけないか・・・。めぐねえ自身も混乱しているしな、でもこれは逆によかったのかもな。こんなことを知ったらきつとめぐねえの事だからなんやかんや自分だけで抱え込んでしまうかもしれないから多少強引ではあったが秘密を共有でき

る人がいるというのは心強いし。

「とりあえず、今は由紀たちには話さないで置いた方がいいな。せつかく、あいつらに笑顔が少しづつ戻ってきたんだ、余計な心配はかけさせないほうがいい。」

「そうね・・・でもそれは龍宮さんも同じよ。龍宮さんもこのことは私に任せて「めぐねえ。」

はあ、めぐねえ・・・違うな、佐倉先生にちよつと言っておかないとな。

「オレは佐倉先生一人に抱え込ませるつもりはないです。二人で抱えましょう。一人で抱え込んでも重圧に潰れてしまうだけです。二人で分け合った方がいいと思います。それに秘密を共有できる人がいるというのは力強いものです。これでもオレ頭はまあまあいい方です。佐倉先生も知っているでしょ？オレの知識少しは役に立つかもしれない。だからここは二人で背負っていきましょう・・・生徒を巻き込むのは心苦しいと思つてたりしてます？・・・笑っちゃいますね。これでもオレは——レディースに所属していた時は何百という舎弟の上に立っていたんですよ？ある程度の重圧には慣れていきます。安心してください。こんなことでは潰れませんから。」

オレはめぐねえの手をオレの手で包み込んで安心させるように言った。めぐねえは暫くポーつとしたと思うと見る見るうちに顔を赤くさせて慌て始めた。

「わ、分かりましたから、手を離してもらつていいですか？」

「？別にいいですけど。」

なんでめぐねえ顔赤くなつてんの？つてそういうえば・・・。

「あ!?!めぐねえ今何時!?!」

「え?今は・・・え?もうこんな時間?」

「あああ!?!悠里に胡桃と由紀も連れてくるように頼まれてたんだ!?!もう間に合わないなこれ・・・。一緒に謝ってくれよーめぐねえ。」

「・・・ふふふつ、そうね。私にも非はあるし一緒に謝りましょうか。」

「ほんとだぞー!言質とつたからな!悠里つて怒ると怖いんだよな!」

「そんなにごわくないでしょ?」

めぐねえは悠里に怒られたことないからそんなこと言えるんだよ……。

オレはとぼとぼ悠里がいる部屋へとめぐねえと一緒に向かうと案の定般若モードの悠里とそれにあてられ無言で食べている胡桃と由紀の姿が……。

因みにめぐねえは開始数秒でオレを売りました。が、意味もなく二人仲良く怒られました。

——
どれほど嬉しかっただろうその言葉が、どれほど救われただろうその言葉で。

私一人だったら耐えられたらどうか？おそらく耐えられたとしても私自身の精神への負担はひどいものになってたと思う。

ただ一人の生徒なのにその言葉はとても勇気付けられて頼りになり、年下なのに頼つてしまいたくなるようなそんな姿だった。

確かに彼女がレディースで多くの舎弟というのを持っていたり学校でもちよつと不良な人たち全員が彼女の事を慕っている理由がよく分かった。

それと同時に危ういとも思った。

彼女は頼られなれているけどそういう人に限って頼るということが苦手なことが多い。

彼女も人の事を言えないと思う。どちらかというと一人で解決してしまおうとするタイプだ。

だから、私だけでも彼女を支えてあげよう。

可能ならば彼女の隣で——先生なのに生徒一人を特別扱いする悪い先生になっちゃいます。

絶対に一人にさせません。だから覚悟してくださいね……龍宮さん。

第5話 ぶかつ

「とういうわけで拓海ちゃんにもこれに入部してもらいます。」

「・・・何がとういわけなんだ？」

ある日の事、オレがいつも通り見回り活動や昼寝をしようかと思っ
ていたところに悠里が紙を持って現れ突き出してきた。

「・・・学園生活部？」

「そうよ。学園で生活する部だから学園生活部。何時までも暗いまま
いても気が滅入るでしょ？どうせなら楽しいことをしようというこ
とで考えたの。部活として学校に住んでいるって考えれば、お泊り会
みたいで楽しく過ごせればいいなって・・・どう？」

「どうって・・・オレは悠里たちが良いっていうなら別に賛成する理由
もないしいいけど・・・。」

「そうーじゃ入部決定ね！因みに部長は私で拓海ちゃんが副部長だか
ら。」

悠里はそういうとるんるん気分部屋から出て行つた。なるほど
ね・・・学園生活部か・・・。少し思うところもあるけど、それで
いつらの気が少しでも紛れるのであればやったほうがいいと思う。

オレは今度こそ寝ようと思いつつソファに寝っ転がろうとしたら、何か
伝え忘れたのか悠里が戻ってきた。

「あ、ごめんなさい。これからその部活動について話し合いたいから
集合してくれる？」

「えー・・・まあいいけど。」

オレはのっそりと起き上がると悠里の後をついていった。

「皆集まったわね・・・それじゃ、これから第一回学園生活部ミーテ
ィングを始めます。」

「わーいー！」

「ミーティングって話し合いだろ？それなのに何でそんなに由紀ははしやいでんだ？」

「だって、何か楽しいじゃん！皆でやるってことがね！」

「ふふ、そうね。それじゃ、その調子で由紀ちゃんに何か話し合いたいことがあるか聞いてみてもいいかしら？」

悠里はそう由紀に聞くと由紀は暫く捻ると・・・顔を上げた。

「約束事とか作ったほうがいいんじゃないかな？ほら、学園生活部○
○条みたいなもの！」

「いいんじゃないか？そうしたほうが由紀の勝手な行動も防げるだろ。」

「ちよつと胡桃ちゃん！それはどういうこと！」

「そのままの意味だよ。」

「にや、にやにおー！」

「ここら、話し合いするんでしょ？恵飛須沢さんも挑発しない。」

めぐねえが上手い事収めると悠里に目配せをして、悠里はうなずき黒板に字を書いていった。

「それじゃ、由紀ちゃんが言ってくれたように学園生活部の心得でも考えましょう。」

「こんな感じでいいかしら？」

「いいと思うー！」

「まあまあ、様になってんじゃねーか？」

「だな。」

話し合いで出た意見をもとに悠里とめぐねえでそれらしい言葉を使い学園生活部の心得が完成した。

学園生活部の心得

第一条 学園生活部とは、学園での合宿生活によって、授業だけでは触れられない学園の様々な部署に親しむとともに、自主独立の精神を育み皆の模範となるべし

第二条 学園生活部は施設を借りるにあたり必ずその恩に報いるべし

第三条 夜間の行動は単独を慎み常に複数で連帯すべし

第四条 部員はいついかなる時も互いに助けあい支えあい楽しい学園生活を送るべし

第五条 部員は折々の学園の行事を大切にすべし

「それじゃ、これらを必ず守るようにもし破ったらその時は……罰ゲームでも受けてもらおうかしら？」

「うへー、罰ゲームって……嫌な予感しかしねー。」

悠里は心得が書いてある紙をめぐねえが持ってきた額縁に入れて部屋に飾った。

「よし、それじゃ、時間も時間だしオレ夜の見回り行ってくるわ。」

「私もついてくぜ。夜間の単独行動を慎む……だからな！」

胡桃はそう言いシャベルを担ぐと私の隣にやってきてニカツつと笑った。

「了解。それじゃよろしく頼むぜ。胡桃。」

「なあ、最近、見つけた敵を念入りに倒しているけど……何か理由があんのか？」

「え？ああ。由紀たちに何かあったらいけねーだろ？だから不安の芽は潰しとくが吉なんだよ……っと！おし、こちら辺もあらかた片付いたな。もう奴らないか？」

「ああ、姿は見えないな……今日はもう帰るか？」

「そうだな・・・そうするか。んじや、帰ろーぜ。」

そう言つて、拓海はずんずんと歩いて行つた。

なあ拓海教えてくれ・・・さっきのは私の見間違いでいいんだよな？

私は拓海の後ろ姿を眺めながら思った。

だって、そうだろう？あいつらの頭を木刀で殴つてた時の横顔が笑っているように見えたんだから・・・。